

難民救済の部族法

——バローチ民族における「バーホート」の考察——

村山和之*

Note on “Bahot”: A Custom of Asylum for Refugee in Baloch Tribal Laws

MURAYAMA Kazuyuki

The aim of this paper is to describe a custom of asylum for refugee called Bahot in traditional tribal society of Baloch people, and offer the basic information of tribal custom of them.

The Baloch either speaking Balochi language or Brahui language are inhabitants of Balochistan area located on the border lands in Pakistan, Afghanistan and Iran.

They have lived their tribal life under with their custom named *riwaj* just like laws and the principal code of honour called *nang* as their constitution for a long time.

The major consideration and work here will be a classification of material into two group *riwaj* and *nang* again but correctly. Then, by using of examples on Bahot being recorded in epics, folklore, historical book, novel and even author's experience, the actual state of the custom of asylum for refugee would be unveiling step by step.

With the help of local Baloch scholars in Quetta, the material for this paper was collected during author's stay in Balochistan, August 2013, March 2014 and August 2015.

キーワード：バローチ，ブラーフイ，部族慣習法，難民救済

Key Words: Balochistan, Baloch, Brahui, Riwayat, Bahot, honour

はじめに

本稿は、パキスタン、アフガニスタン、イランに跨って居住するバローチ民族 *Baloch* の部族慣習法 *riwaj* の中から、難民救済：バーホート *bahot* の項に注目し、15世紀の戦時時代から現在に至るバローチ民族の思考と行動を支配する源の一つを汲み当てよ

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員，中央大学総合政策学部兼任講師

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University;
Part-time Lecturer, Faculty of Policy Studies, Chuo University

うとする試みである。

個人主義が徹底して行き渡っている現在の日本社会において、ある日突然見知らぬ人が生命と財産の庇護を求めて玄関に立って訴えてきたとき、すぐに救済へと機能するシステムがあるだろうか？

いかなる理由であれ「難民 *bahot / refugee*」となった人は、何よりもまず命の危険から、属していた共同体を離れ、他の共同体に対して無条件で救済を請うものである。もし、難民を受け入れた場合は、受け入れ側の共同体にも、彼らの生命と財産を全面的に守る義務と責任が生じる。それは、難民の生命と財産を脅かす個人・集団に対して、難民に代わって対処することを意味し、戦闘が勃発した場合には、自らの命を賭して難民を守らねばならない。また、その義務を怠ると、自らの「名誉 *nang / honour*」が失われ共同体（家族・親族・部族構成員）内から「恥 *mayar / dishonour*」として叱責、非難され、村八分にされることもある。その憂き目を見ぬよう、バローチ民族では今もなお誰もが義務の執行にこだわるのである。

本稿では、第 I 章でバローチ民族、第 II 章でバローチ民族の部族慣習法について短い概説をおく。第 III 章で難民救済の部族慣習法バーホートについて、第 IV 章で文学作品を通してバーホートの現場の裏表を考察する。

I バローチ民族について

1a. バローチ民族とは

バローチ民族とは、パキスタンのバローチスタン州、イランのシースタン・バルーチスタン州、アフガニスタンの南・南西部国境地帯に居住する主要民族である。少数ではあるが、オマーン、アフリカ東海岸、トルクメニスタンにもバローチ民族をみることができる。

宗教は、ほぼイスラーム教スンナ派である。しかし、厳格な教義を情熱的に厳守する喜びは彼らの中にはなく、あくまでも個人の心身ともに大切な部分（秘部）として尊重し合っているように見える。礼拝の時間がきても、メッカに向けて祈る人も祈らない人もいる。それでいて問題にはなっていない、緩やかなイスラームの実践がバローチ人の特徴といえよう。また、アラビア海沿岸のマクラーン地方には、異端とされるズィクリー派 *Zikri* を奉じるバローチ集団も健在で、スンナ派イスラームと共存している。

基本的に族長を頂点とする部族社会を形成しており、部族連合の集合国家としてバローチスタン・カラート藩王国 *Riyasat-e-Qalat Balochistan* を 18 世紀半ばに成立させた。19 世紀末に英国の完全な傀儡国家とされるまでは、カラートを都とし、バローチ部族連合

の盟主としてアフマドザイ王家 *Ahmadzai* から歴代のハーン (藩王) が選ばれてきた。今もなお、カラートのハーン Khan of Kalat に対する敬意は民衆の中で失われていない。

伝統的な生業として、ヤギ・ヒツジを中心とする遊牧と天水に依存する農業が主流であった。バローチ民族の特徴として、商業を卑しむことがあげられる。自ら率先して行う、対価や利潤を目的とした労働やそれを伴う経済を嫌ってきたのだ。そのため、給料が発生したとしても、あくまで頭首に大義を持って忠誠を尽くす奉仕が好まれてきた。その典型例が、傭兵や警備兵などへの参加であった。19世紀半ばに英国によってカラーチで結成され幕末の横浜にも四ヶ月ほど駐留したバルーチ連隊 *Belooch Regiment* は、英国インド陸軍の重要な部隊であった。

現在は、農牧業、漁業、警察関係、諸公務員そして商業にも従事するバローチ人は珍しくない。

1b. バローチ人とブラーフイ人

バローチ民族は、母語を異にする二つの部族集団から形成される。バローチー語 *Balochi* (バ語) を母語とするバローチ人そしてブラーフイー語 *Brahui* (ブ語) を母語とするバローチ人である。後者をブラーフイ・バローチ人または単にブラーフイ人と呼んでいる。バローチ民族・バローチ人であるというアイデンティティは、自他ともに認めあっている。

本稿では、特記しない場合は、バローチ人もブラーフイ人も、ともにバローチ人、またはバローチ民族と表記する。こと部族慣習法に関しては、どちらの人々も同じ認識を共有しているからである。

バ語はイラン語族の北西方言群の位置にクルド語とともにあり、ブ語はドラヴィダ諸語の極西の飛び地にあたる。

バローチ人がイラン南東部からパキスタン南西部から南東部にかけて広く分布している一方で、ブラーフイ人は、バローチ人分布地帯のほぼ真ん中を縦貫する中央ブラーフイー山脈に居住している。ブラーフイ人地域を挟んで、東西にバローチ人地域が分断されて位置していることになる。

ブラーフイ人にはバ語とのパイリンガルが少なくない。それに対してバ語話者にはブ語を解しない人が少なくない。

母音数はほぼ同じだが、子音の数は、ブ語の方が多く発音も難しい。また両者ともに名詞や形容詞では多くの語彙に対応を含みながらも共有しているが、動詞に関してはバ語をはじめこの地域の諸言語が全て屈折語であるのに対して、ブ語だけが膠着語の形態をとることとも少なからず関係しているはずだ。

名詞に関してだけ例をあげるが、「目」を意味するバ語チャンム *chamm* とブ語ハン *khan*,

「主、男性への敬称」バ語ワージャ *wajah* とブ語フワージャ *khwajah*, 「王、藩王」バ語ハーン *han* とブ語ハーン *khan* など対応しあう語彙も少なくない。一方で、「山」バ語コー *koh* とブ語マシ *mash*, 「塩」バ語ワードゥ *wad* とブ語ベー *be*, 「水」バ語アーフ *af* とブ語ディール *dir*, 「乳」バ語シール *shir* とブ語パーヒ *palh* などには対応はみられない。

部族慣習法をも含め、ほぼ共通の文化を有する両者であるが、ブラーフイ人のほうがバローチ人より社会的な閉塞性が著しい。18世紀、イスラーム教原理主義によってバローチ民俗を改革しようとしたブラーフイ人の藩王ナスィール・ハーン一世 Nasir Khan I がおり、この政策によりお膝元であるブラーフイ人地域から、非イスラーム的とされたバローチの慣習や迷信が消えていった。男女間の隔絶や異教徒の行動制限などがそれにあたる。

この政策によって男女間の恋愛をテーマとした詩や文学運動、男女共同の集会や舞踊等が、ブラーフイ人社会ではバローチ人社会に比べて後退してしまった。

II バローチ民族の部族慣習法について

IIa. リワージ

部族社会を構成するバローチ民族の慣習的規定、つまり部族慣習法としての義務は、一般的にリワージ *riwaj* というアラビア語起源の言葉を使って表す。

ウルドゥー語やヒンディー語でもリワージという語は使われるが、こちらは部族慣習法というよりは、単純に風俗、習慣、流布、慣行、一般化、盛んであることを意味する。ペルシア語では、流通、流布、通用、普及、流行を表す。

部族慣習法に近い意味をなす用語としては、むしろラスム *rasm* というアラビア語起源の言葉が用いられる。ウルドゥー語では規則、規範、しきたり、儀式、ラスム・オ・リワージ *rasm-o-riwaj* (ラスムとリワージ) と並べて習慣、慣習となる。ペルシア語では、ラスムのまま慣習、習慣、風俗、儀式、規則を意味する。

バ語では、ドード *dod* という語が習慣、風習、慣習を表している。

バローチヤート *balochiyat* は「バローチ性、バローチ人であること」を意味する比較的最近(80年代頃)使われだした言葉ではあるが、内容はリワージそのものを指している。

IIb. リワージの項目

バローチ民族全部族に行き渡る共通のリワージは、もともと条文化されていたわけではなく、バローチ社会の中で長年実践されてきた伝統的行動規範である。現存するものは、カラート藩王国の藩主ナスィール・ハーン一世(在位1750-94年)の治世に記録された。

バローチ民族文化において「良き人」とは、リワージに従い、難民救済、客人歓待、復

警履行を実践する人であるとされ、リワージの司法的根拠と執行責任を、ジルガ *jirga*¹⁾ と呼ばれる部族評議会が担ってきた。（Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428-429）

リワージの内容について著書や論文に記述がある、ミール・グル・ハーン・ナスィール Mir Gul Khan Nasir, イナーヤト・バローチ Inayat Baloch の成果を踏まえて、最も新しい分類を提示したアームナ・アッバース・メーンガル Amna Abbas Mengal²⁾ のリストにたずねることとする。

- (1) 血の復讐の完遂（ヴェール *ver*, ベール *ber*, ホーン *hon*）
- (2) 難民（バーホート *bahot*）を救済し、庇護のために死ぬまで戦う
- (3) 信託された財産（家畜, 財産, 土地）の死守
- (4) 客人の歓待と客人の生命・財産を死守（メーマーン・ダーリー *memandari*）
- (5) 女性, 弱者³⁾, 幼い子供に対する殺害の忌避
- (6) 罪人家族の女性の嘆願によって罪を赦す, ただし不貞による処刑は除く
- (7) 聖者の聖域（住居・聖墓）内での殺害の忌避
- (8) イスラーム学者, サイヤド, 女性が聖典『クルアーン』を頭上に掲げて調停のために戦場に現れたときの戦闘停止
- (9) 不貞男女の処刑（モーン *mon*, スィヤー *siya*）

以上, 9項目がバローチ民族共有の部族慣習法リワージである（Mengal 2015: 214-218）。

IIc. ナングとマヤール

リワージが民法や刑法に対応する規範だとすると、リワージを成立させるバローチ民族慣習憲法にあたる絶対的価値原理がナング *nang* と呼ばれる概念である。バローチ世界を構成する緯糸がリワージ, 経糸がナングであるにとらえてもよい。

ナングはペルシア語起源の言葉で、ペルシア語では恥, 不名誉, 恥辱とともに名声と名誉を意味する。ウルドゥー語では恥, 不名誉, 汚名となり, 名誉までは意味しない。

ところがバ語とブ語においては, honour: 名誉, 面目, 体面, そして reputation: 名声, 名望, 評判の意味に特化し, 恥や不名誉の意味には用いられない。

ナングの対極にある恥, 不名誉をあらわす概念は, バ語とブ語でマヤール *mayar* と呼ばれる。「計測, 基準」を意味するアラビア語ミアヤール *mi'yar* を語源に, ペルシア語でメァヤール *me'yar* 「基準, 基準, 尺度」そしてウルドゥー語ではメヤール *meyar* 「基準, レヴェル, 水準」の意味で受容されてきた名詞ではあるが, バローチ民族にとっては「恥・不名誉（の基準）」として重大な位置にある⁴⁾。

ナングに基づいて行動することこそが、マヤールの汚名を負わない前提条件となっている。ナングとマヤールは常に対義関係にあり⁵⁾、ナングをおとしめる侮辱や無礼を被ることがマヤールの状態となる。マヤールを被った者は、その償いを求めジルガや族長に訴えて解決を図るが、報われなかった場合は、血の対価（復讐）を求める段階へと進展する。Mengal は、バローチー・ナング *Balochi nang*⁶⁾ として14項目にナングを分類した。

1. 宣戦布告せずに敵を攻撃せぬこと
2. 敗れて逃走する敵を殺傷せぬこと
3. 武器を放棄した敵に手を上げぬこと
4. 幼い男子と婦女子を殺傷せぬこと
5. サイヤド、女性、ヒンドゥーが仲裁に来た時は争いをやめること
6. 自分のバーホート（難民）の庇護のためには、命と財産を惜しまぬこと
7. 客人を歓待し、客人の庇護のためには命を惜しまぬこと
8. 敵が仲裁者を伴って和解のために来訪し、敷物⁷⁾の上に座ったら赦免すること⁸⁾
9. 嘘をつかぬこと
10. 口に出した言葉（コール *qol*）を、命を失おうとも遵守して生きること
11. 血の復讐は数百年かかろうとも完遂させること
12. 自分の名誉（ナング）である妻・娘・姉妹の尊厳を守って死ぬまで戦うこと
13. 自分の財産・遺産を死守すること
14. 不貞を犯した男女双方を殺害すること

6. は(2)と重なる内容ではあるが、難民の救済がナングの原理に基づいた実践行為として認識されていることを意味する。同じ例が、7. と(4)の客人歓待そして14. と(9)の不貞男女の処刑にもあらわれている。

バローチ民族にとって、一般的に女性は一族の大切な財産であり名誉であると認識されている。従って、どんな形であれ男女関係の不義不始末は、一族全体の財産と名誉が損なわれたことで(3)を侵し、12. を汚したことになる。不倫・不貞に対する処罰は、(5)の禁止・忌避されている女性の殺害や、(6)罪人家族女性の嘆願による免罪適応外にあたり、14. と(9)がもれなく適用され、ともに「黒」を意味するモーン *mon*（ブ語）とスイヤー *siya*（バ語）の語で特殊扱いされる。

「殺す」にあたる動詞も、敵や動物には、カスイフィング *kasifing*（ブ語）とクシャグ *kushag*（バ語）が通常は用いられるが、リワージを破る不倫・不貞男女の処刑に対しては、それぞれの語で直訳すると「黒を与える」を意味するモーン・ティンニング *mon tinning*

とスイヤー・ダーヤグ *siya dayag*（バ語）という特別な表現を用いて線を引いている。

以上述べてきたように、伝統的にバローチ民族は部族慣習法の実践により、バローチ民族のアイデンティティを形成し維持してきたことが推察できる。彼らの思考そして行動原理の源である部族慣習法リワージは、憲法に当たる「14条の名誉」（ナング）と法律に当たる「9条の義務規範」（リワージ）から成立しているのだ。

リワージに関しては、2015年8月、クエッタのバローチスタン大学ブラーフイー語学科の学生たちに「あなたたちにとってバローチ民族のリワージとは何か」と質問した時、興味深い回答が得られた。

ある快活な女子学生が、「私は刺繍（ドーチ *doch*）をすることは、バローチ女性のリワージに当たると思います。先祖代々受け継がれてきた各部族の刺繍技術やデザインは、私たちの拠り所であり、子孫にも伝えていかなければならない財産です。私はバローチ刺繍をリワージだと認識し、励みたいと思います」と答えたのだ。

思わず拍手してしまったが、なるほど、リワージを「流布、盛んである」というペルシア語やウルドゥー語に共通する語義でとらえた使い方である。彼女がバローチ民族の、しかも女性の文化的アイデンティティである刺繍をリワージだと認識している点が注目に値する。リワージ界がさまざまな領域へ拡大している証拠であると思えた。

III 難民救済の部族法：バーホートのイメージ

本章では、「9条の義務規範」の中でも、血の復讐、客人歓待・保護とならんで良きバローチ構成員が行うべき三本大柱に数え上げられる「難民の救済」の具体的なイメージを可能な限り明らかにしてみたい。

IIIa. 難民を意味するバローチ語：バーホート

バ語そしてブ語において「難民」はバーホート *bahot*⁹⁾ と表わされる（Barker-Mengal 1969 vol. 2: 415）（Bray 1934: 61）。第二音節の *h* は弱く発音され、時に欠落してバーオートときこえる。語末の *t* は反舌音である。隣接する言語には類似するものはなく、バ語とブ語固有の単語かもしれない。

関連するバ語としては、バーホートダール *bahotdar* 「難民救済者、庇護者」¹⁰⁾、バーホートダリー *bahotdari* 「難民救済の慣習」¹¹⁾、バーホーティー *bahoti* 「難民の避難所」¹²⁾ があげられる（Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428）。

リワージの一項目として一般的に語られるバーホートとは、難民自体を指すだけではなく、難民救済の実践すべてを表す名詞として通用している。その実態は、バーホートがバ

ーホートダールにバーホーティーを求めることができるバーホートダラーと呼ばれる伝統的慣習である。語義的にはバーホートダラーの名称で運用されるべきであるが¹³⁾、通例的にバーホートで定まっているといえる。

まず、バーホートであるが、これは様々な災難から避難、逃亡して、命の危機にあるが故に、自分の命と財産の保護を求める人をさす。敵に追われて避難逃亡中であるケースが一般的である。また、バーホートになることは、マヤールを意味しない。命が危なくなり本当に困った時は、原則として我慢せずに誰かに堂々と庇護を求めてもよいのである。

バーホートを受け入れる条件が整わない時には、拒否してバーホートダールにならないことも可能である。

例えばバーホートを追ってくる敵が、自分より強大だと判断した時や、自分と味方同士の関係にあった場合、バーホートダールにならない選択ができる。バーホートダールの義務、責任は大変重く、バーホートダラーの関係が宣言され成立してしまうと、自分の命や財産を犠牲にしてでもバーホートの命と財産を守りきらなくてはならない掟だからだ。当然その成り行きを世間が注視している。途中でその義務を放棄できる者は、バローチ人であるかぎりまずくない。

バーホートダールは、全力でバーホートを庇護し、バーホートが次の土地やバーホートダラーの下へ移動するまで、無償で 24 時間休みなく守りきらねばならないため、実践が難しい。それゆえバーホートは、名誉極まりない特別なリワージとされるのだ。

IIIb. もう一つの避難所：パナー

興味深いことに、バローチ民族にはバーホートとレベルを異にする難民救済システムがある。ペルシア語のパナーフ *panah* からパナー *pana* (Bray 1934: 228)¹⁴⁾ という形で借用されて表わされ、避難先、安全なところ、逃げ場所、庇護といった広い意味での避難所をさす。

ウルドゥー語もパナーフでほぼこの意味を踏襲しており、バシュトー語だけは「避難（危険に迫られた人が庇護を求めて他人の家に入ること）」を意味する名詞ナナワター *nanawate* をもつ (縄田 1982: 118)¹⁵⁾。

パキスタン、アフガニスタン、イランの非バローチ社会において、ごく一般的な「避難所、庇護」を表わすこの用語は、バローチ社会においては、バーホートよりも社会的責任が小さく、リワージ的義務が生じない保護や避難所の提供を意味している。

バローチスターンでバローチ人たちに尋ねても、バーホートは命がけで全面的に際限なく難民を守り通すこと、パナーは一時的に避難場所と可能な保護サービスを提供するだけだと答える。

ある人は、パナーは雨宿りに軒先や玄関先を使わせてやるようなものだ、雨が上がればほどなくいなくなる。一方バーホートは、屋敷の奥に客間をこしらえて、四六時中見張って守らねばならず、出ていく時がいつになるかもバーホート次第、休まる時がないという。

バローチ民族はバーホートとパナーという難民救済の装置を太刀と脇差のように二本携帯し使い分けている。そしてパナーよりもバーホートの方に優越性と名誉を与えている。

ムガル帝国第二代皇帝となるフマーユーンは、シェール・シャー・スーリーに敗北し、一時期インドを追われペルシアへ避難していた。フマーユーンのこの逃避行をどの言葉で表現するか、興味深い例文を引用したい。

まずウルドゥー語辞典（加賀谷 2005：326-327）パナーフの項に添えられている文はこうだ。

Humayun ne iran ke badshah ke pas panah li. フマユーンはイラン王の許に保護を求めた。

次にイランへの道でフマーユーンを保護し、イランまで無事届けたチャーギー地方のバローチ人領主マリク・ハティー Malik Khati が登場する。数年後デリーを奪還したフマーユーンが旧恩に報いようと、報奨を授けるからデリーへ参ぜよと使者を送る。マリク・ハティーはその使者にこう返答するのだ（Mengal 2015: 216）。

Ham brahui / baloch bahot (panah) men ae hue shakhs se qimat ya muaviza wusul karna apni tauhin samajhte hain. 我々ブラーフイ、バローチの人間は、避難を求めて来ていた人から代価や報酬を受け取ることは侮辱されたことと信じるものである。

バーホートに対応する語をもたないウルドゥー語では、大きな意味での「保護」でパナーフを用いている。一方で、二段階の難民救済システムと固有の用語を有するバローチ側の表現では、ウルドゥー語で記述する時でも、フマーユーンはバーホートとして庇護されていたという認識にある。

IIIc. バローチ民族に語り継がれるバーホートダーリー

実践の困難さとともに誇るべき名誉の具現でもあるバーホートは、バローチ民族共同体の中で、如何に受容され語り継がれているのか。幾つか代表例を提示したい。

まず、バローチ民族、中でも特にバローチ人ならば、誰もが真っ先に思いつくバーホー

トダーリーに纏わる物語の主人公は、リンド・バローチ族の族長で英雄のミール・チャーカル・リンド Mir Chakar Rind であろう。

そもそもこの難民救済譚は、ラーシャーリー・バローチ族の美女ガウハルが、他部族であるミール・チャーカルの下に、仔ラクダを伴って避難してきたときから始まる。ガウハルは、族長ミール・グワーラム・ラーシャーリーの執拗な求婚を拒み続けたことで、意趣返しにあい、怒って家畜と家財をまとめて、チャーカルのバーホートになったのだ。自分の部族の女性が他部族のバーホートになったことは、ラーシャーリー族の感情を害した。

ある日、ラーシャーリー族の若者たちが、狩猟を口実にやってきて、放牧されていたガウハル所有の仔ラクダを殺害した。この所業に侮辱されたと感じたリンド族はガウハルの哀れな仔ラクダのために復讐にでた。女をめぐる両族の血を血で洗う復讐合戦は、有名な「リンド・ラーシャーリー 30 年戦争」にまで発展した。

この部族間戦争は、リンド族の劣勢から始まったが、ヘラートやカンダハール諸侯の援軍を得たチャーカル軍は、不意を突いた夜襲でラーシャーリー族を虐殺した。ラーシャーリー族は大敗を喫し、族長グワーラムは部族の民とともにスインド地方に落ち延びた。チャーカルも勝利したとはいえ、この戦争の結末に悲嘆にくれ、多くの部族民とともにバローチスターンを離れ、パンジャープ南部に移住していった。後年イランで復興し、再びデリー奪還に向かうムガル皇帝フマーユーンに味方して、1555 年、チャーカルとパンジャープのバローチ軍はインドへと旅立つ。

ミール・チャーカル・リンドの墓は、現在もパンジャープのサートガル村 Satghar にある。(Barker-Mengal 1969 vol. 1: 425-428)

次に有名なバーホートダールは、ドーダー・ゴルゲージ Doda Gorgej であろう。リンド族の支族ゴルゲージの族長であったドーダーは、文字通りバーホートの財産を守る戦いの中で戦死した英雄として讃えられている。

詳細は(村山 2008)に譲るが、バーホートとして迎え入れられたプレディー・バローチ族の未亡人サンミーの財産(牛)を、亡夫の遺言どおりに守ろうと命と名誉をかけるバローチ像がみてとれる。

結果的には、卑怯な待ち伏せで命を落とすドーダーではあるが、彼のリワージに基づいた行動を侮辱や非難する者はいない。生き方も死にもお手本のようなバーホートダールぶりで、理想に近いバローチ英雄の一人として語り継がれている。

彼ドーダーの殺害に対する復讐は、義弟バーラーチ Balach によって果たされる。復讐達成者を意味するベールギール *bergir* としてバーラーチも、重要なリワージを実践してみ

せた名誉ある英雄の一人になる。

一風変わったバーホートダーリー譚も語られている。パローチ民族にとってバーホートは、人間だけに限定されないという例証である。

100年以上前、ダーダル近辺の遊牧民テントが立ち並ぶごく平凡なキャンプ村で、70人以上の死者をだす殺傷事件が起きた。

ある悪戯盛りの幼児がテントに入ってきたヤモリ¹⁶⁾をいじめた。ごく日常的な風景である。ヤモリは難を逃れようと、追いかけられながら別のテントに入り込んだ。幼児もしつこくヤモリを追ってそのテントに入ってきた。

そのテントを守る女性が、弄ばれて殺されようとしているヤモリを憐れんで幼児を叱った。「このヤモリは命の危険にさらされて、私の下に逃げ込んできたのだ。苛めるのはやめなさい！」

しかし、幼児はきく耳をもたずヤモリを追うのに夢中である。

女性は「このヤモリはバーホートを求めてここに来た。私のバーホートを苛めるのはやめなさい！」とリワージに訴えて説得した。

しかし、幼児は意味をよく理解しないままヤモリを追い続けた。

仕事から帰ってきた男たちに、女性は一部始終を話し、バーホート保護の原則から、幼児の家族へと抗議に行かせた。「無垢な子供が虫けら一匹苛めたくらいで大の大人が何の騒ぎだ!?!」「ヤモリであってもわが家人のバーホートである以上、嚴重に抗議する！」といった応酬が次第に熱を帯びてゆき、どちらかが暴力をふるい、両家に味方する部族民を巻き込んで大喧嘩になってしまったのだ。

以上が、双方合わせて70人以上が死亡した未曾有の大事件：「ヤモリの難民事件」の顛末である。これは創作ではなく実際に起こった出来事として人々の中で認識されている。

バーホートダールが、一旦その対象を自分のバーホートとして認め、宣言した以上は、バーホートの資格に生物上の区別はないことが分かる。そして年齢や性別に関わりなく、パローチ民族構成員である以上リワージは等しく適応され、それに従わねばならないこともまた理解できる。

IV ジャミール・アフマド著『さまよえるハヤブサ』にバーホートを読む

IVa. 『さまよえるハヤブサ』

最後の章では、パキスタンとイラン、アフガニスタン国境地域で長くパキスタン政府の

行政官を務めた作家ジャミール・アフマド Jamil Ahmad (1933-2014) の英語の著作『さまよえるハヤブサ』The Wandering Falcon (2011)¹⁷⁾ に描かれたバローチ民族のリワージを、バーホートを中心に読解を試みる。

現在はインド側のパンジャーブ州ジャランダル市に生まれたアフマドは、パキスタンに移住し、ラホールで高等教育を受け、1954年にはパキスタン政府の上級公務員となる。スワート、ワズィーリスターン、バローチスターン（クエッタ、チャーギー）の辺境地帯の行政官として、バシュトゥーンそしてバローチ部族社会と深くかかわる。ソ連侵攻直前直後の1979年には公使としてカーブルのパキスタン大使館に勤務。公務員として最後の任地はバローチスターンで、バローチスターン州政府の行政長官 Chief Secretary であった。

ロンドンで巡り会ったドイツ籍のヘルガ夫人に詩作をけなされたことがきっかけで、短編小説に転じる。「私たちが15年以上一緒に過ごしてきた、あの部族地域のことを書きなさいよ」と言われてから2年余りを要して、1973-4年頃、本作は誕生した。

ところが、出版社には見向きもされない。環境運動家でソーシャルワーカーとしてもよく知られるヘルガ夫人は、アメリカに、イギリスに、ローカルラジオ局主催のコンペにと、実に40年近くも夫の作品の持ち込み運動を続けたという。最終的にインドのペンギン社から2011年発刊された本作は、2011年度のアジア人の文学賞 Man Asian Prize の最終選考まで残った。

本作は短編9章からなり、物語の舞台は、バローチスターン州から、連邦政府直轄部族地域（ワズィーリスターン）、ハイバル・パフトゥーンフワー州、北方地域まで、パキスタンの陸の国境線に沿って南西部から北東部までに至る。各民族の特徴や習俗が、それらを実見した作者の愛に満ちた視点で、直接的にそして象徴的にリアルに描かれる。

9章全体を貫く主人公が、バローチ人の駆け落ち夫婦から生まれた少年トルバーズ（バシュトー語で「黒きハヤブサ¹⁸⁾」）である。彼の出自、さまざまな民族の慣習に育てられるさまが、厳しくも温かい異例の成長物語として胸をうつ。部族辺境地帯を運命に駆られて渡り歩いたさまよえるハヤブサが、終の棲家（巣）を構えるところで物語は終る。

IVb. バーホートダーリーの現場とは

本作において、バローチスターンを舞台の中心に据えた部分は、冒頭の第1章「母親の罪」The Sins of the Mother¹⁹⁾ と第2章「名誉の基準」A Point of Honour²⁰⁾ である。

そのなかでも、本稿の主旨にかなう物語が読み解ける第1章をテキストとして用い、パンジャービー人行政官が感じ、体験し、学びとって著したバローチ人のバーホートダーリーの姿を読み取り、考察してみたい。以下にその場面のあらすじを記す。

パキスタン、アフガニスタン、イランの国境線が最も接近するパローチスタン極西部の荒涼とした山岳砂漠地帯に、兵士が駐屯する辺境警備の砦がある。季節によっては砂嵐が連日続き、飲料水も砦の外へ僅かながらの湧水を汲みに行かねばならない。砦の司令官も、駐屯する警備兵も、この地の酷暑と厳寒には一期一年しか耐えられない、文字どおり最果ての辺境警備砦だ。

ある日、一頭のラクダとともに、若い男女が砂まみれになって砦の門に辿り着く。女はショールを被り直して頭髮や体を隠すこともできぬほど、疲れきっている。警備兵たちは女を直視せずに目をそむける。

男は司令官に携帯した水が尽きたことを告げ、水の提供を請願する。司令官の許可をえて、兵士たちが飲み残したバケツ半分の生水を男は受け取る。まず女の顔を水で拭い、ゆっくりと水を与える。次に自分が飲み、最後にラクダに水をまわす。

司令官が他に欲しいものはあるかと尋ねると、自身の中で葛藤したあと、男はしぶしぶ申し出る。

男：はい。私たち二人を難民として受け入れていただきたい。私たちはクールド村出身のスイヤーパード族です。彼女の一族の追っ手から逃れてきたのです。三日の間、この砂嵐の中を歩ききり、これ以上先へはもう……。

司令官：（無愛想に遮って）難民は、受け入れられない。私は君たちの部族法をよく知っている。私も私の部下たちも、部族法に従う人たちとその法に寄り添うことはできない。難民の避難所は与えられない。

男は司令官の言葉をきいて、心の中で怒り、唇を噛んだ。自分たちを難民としてその救済を求めようとする心が折れた。誰かの庇護の下で、ハムサーヤー（隣人）として生きていと申し出ることで、男は自分の名誉をおとしめたと感じていた。男は立ち去ろうと一旦背を向けたが、ここは下手にでるしか選択の余地はないことを瞬時に悟った。

男：（もう一度司令官に向かって）お返事確かに承りました。はい、もう難民にしてくれとは申しません。けれどせめて数日、食べ物と隠れ場所を恵んでいただくことはできませんでしょうか？

司令官：それなら喜んで提供しよう。（先程の厳しい仕打ちを償うかのように急ぎたてて）隠れ家なら、お望みのとおり君たちに進ぜよう。君たちが望む限り、滞在したい限り居てよろしい。（Ahmad 2011: 1-5）

この後、彼らはこの砦を隠れ家（実際には避難所）として6年余りを過ごすことになる。この間にこの物語の主人公トルバズが生まれる。トルバズが5歳になった年、司令官が6人交代した年の冬の朝、とうとうスイヤーパード族の探索がこの辺境の砦まで及

び、一家に危機がおとずれる。

司令官：(忙しなく男を呼び出して) たった今この砦から出ていったラクダ乗りの男は、スィヤーパードの者だ。あいつは君たちのことをいろいろ尋ねていった。わかるだろう？

男：(無言で頷く)

司令官：もしここを発つならば、食堂から食料を持って行きなさい。部下たちが君たちのために袋に詰め込んでおいた。神の御意志があれば、いつかまた会えるだろう。(Ahmad 2011: 11)

こうして、親子三人はラクダに乗って再び逃避行にでる。しかし、すぐに追いつかれ殺される運命を悟った彼らは、水汲み穴で歩みを止め、示し合わせどおりに不始末の責任をとる。

「子どもだけは死なせないで。私から先に行ってるわ」と言い残した女を、「俺もすぐ行くから」と背後から男が射殺する。そしてすぐ後に自分たちのラクダを射ち殺す。

その現場になだれ込んで来たのは、女の父親であるスィヤーパードの族長と女の夫、彼らの手下たちだった。男は、彼ら全員から石打ちの刑で処刑された。残った子どもも殺されそうになったが、族長の一言で処刑は免れる。

死んだ二人の塚が盛られ、スィヤーパードたちは子どもを残して去ってゆく。両親が眠る墓のそば、ラクダの死体に身を潜め、隼雛のトルバズは新たな運命の風に乗って舞い上がる時をじっと待つ。(Ahmad 2011: 13-18)

IVc. バーホートダーリーの現場裏では

以上の部分から幾つか気になる疑問点を四つだけあげ、それに答える形で、この作品で描かれているバーホートダーリーの様相を明らかにしたい。

(1) まず、司令官はなぜ男の難民救済の嘆願を拒んだのか？答えは明らかである。この申し出がバーホート refuge の認定事項であったからだ。

バローチ民族のリワージをよく知る司令官は、部族民同士の抗争に際して、行政上の中立立場を維持せねばならず、どちらか一方のバーホートダールを担う責任の重さを理解している。彼ら避難民を一度でもバーホートとして受容してしまったら、スィヤーパード族の復讐の敵意は、間違いなく司令官とその部下たちに対しても向けられる。職務にさし障る無用な争いの種を潰したわけである。バーホートダールの拒否を貫いたのだ。

(2) では、男から食料と隠れ家の提供を嘆願された司令官は、なぜそれを認めたのか？

司令官は、バローチ民族固有のリワージとしてではなく、一見して一般的に行われるレベルのパナーとしての保護 food and shelter を、実際にはバーホートに限りなく近い形で提供したといえる。名目上、パナーの執行であれば、当該地のバローチ部族民たちから特別に意識されることはないと考えられるからだ。苦渋の選択でバーホートを拒み、良心の呵責を感じていた司令官は、むしろこの申し出に救われたといえよう。作者本人と重なる司令官のよき人間性がみえる。

(3) 司令官がスイヤーパード族のラクダ乗りを砦に入れ、同様に帰したのはなぜか？

誰であろうと砦の司令官は、住民の訴えには耳を貸すものである。はからずも、それがパナーとして匿っていた避難民の敵であっても、公正な司令官は職務を全うする。

すべての事情を察した司令官は、庇護者として最大の慈しみを携えて、いち早く事態の急変を男に伝え助言も支援もしている。ただし、彼には、自分の命と財産を賭けてまで難民の命と財産を守る必要はない。彼らはバーホートではなくパナーであるからだ。

(4) 男が女を射殺した後にラクダを撃ち殺したのはなぜか？

ラクダは砂漠の船であり、この家畜なしにはバローチスターン砂漠地帯で生きてゆくことはできない。男は、一縷の望みをかけて息子の命を自ら象徴的に奪ってみせたといえる。この現場では、不義の子として息子が追っ手に殺害される可能性は限りなく高かった。

しかし、自分は処刑されるけれども、生き残った息子が乗るべき生きたラクダもなしにこの先を生き延びてゆく可能性はないに等しい状況を作り出すことで、息子が彼らの手で殺される要因を最小に抑えたといえる。

男は、子供を殺害することは忌避されるべきであると定めるリワージ、そしてナングに命と引き換えに息子を委ねたことになる。結果として、息子は殺されず、置き去りにされるが、生存するチャンスを獲得したのである。

おわりに

本稿の目的は、1989年より25年余りつきあってきたバローチ民族が誇る部族慣習法の領域とその内容を、より具体的に把握するための覚え書きを作成することにあつた。

幸運にもこの作業を通して、バ語の戦詩からだけでは今まで読み解けなかった、バローチ人が好んで選び取り、リワージを実践する際の自らの規範として受容してきた理想のバローチ人像が、今ようやく鮮明に浮かび上がってきた。

バローチスターンに住むバローチ人²¹⁾の、思考と行動の価値原理を織り成す経糸として

のナングと緯糸としてのリワージの不可分性が理解できるようになった。

憲法に値する「14条の名誉」^{ナング}、そして憲法から発し具体的に広く社会に適応される法律としての「9条の義務規範」^{リワージ}をたたき台のモデルとして調べられた成果は大きい。

これらに加えて、名誉の対義語であり、義務規範を破った者が落とされる世界を支配する「恥辱」^{マヤール}も、憲法違反の罰として、個人に、さらに個人が属する共同体にまで褻ぎを迫る、良心最後の砦として機能する概念であることが分かってきた。

紙面を要したバーホートに関しては、筆者は実はバーホートであったことを告白しよう。2013年8月、治安状況が史上最悪になっていたバローチスターン州都クエッタ市在の母校、バローチスターン大学を訪問せねばならなかった筆者は、バローチスターン研究センター所長の恩師ハミード・シャーワーニー教授 Dr.Prof. Hamid Shahwani に「私はあなたのバーホートになりたい *i na bahot manning khwava*」とブ語で、割と気安くメールと書簡でお願いしたのだ。

願いは叶えられ、大学内の職員住宅近くのゲストハウスに匿われた。ほぼ三食、先生とともにご自宅や大学の研究室で食事をした。先生本人が迎えに来られない時は、大学の警備職員が必ず付き添ってくれた。バザールに行く時も、遠くの友人宅に行く時も、自ら車を運転して送ってくれた。行き先を告げずに遊んでいると、携帯電話が必ず鳴って、現在地と寄宿時間を尋ねられた。

「バーホートダール（である私）はバーホート（にしてくれと言ってきたお前）を守って、敵に最初に討たれて殺される覚悟が常に必要なんだ」とハミード先生がジェスチャーたっぷりに話してくれた時、筆者は感激とともに驚愕、恐縮した。「大変なことをお願いしてしまった！」

それ以来、リワージに関しては、経験したことがあるバーホートから、まずは詳しく知ろうと心に決めていたのだ。

このバローチー・リワージ最大の美徳であり、客人歓待・保護と血の復讐と並んでリワージ三本大柱の一本を構成するバーホートに関しては、今後も具体的事例を問い続け、生きたバローチ民族を正しく対等に理解できるように、バローチスターンでさらに深くさらに広く学んでゆく所存である。

自らバローチ人、そしてプラーファイ人として、自らの言語で、自らのバローチ伝統文化を調査し、その知見を広く共有できるよう公開してくれた現地の学生、教官そして研究者たち全てが愛おしい。彼らと一緒に学びあうことができる幸せに感謝したい。そして、いつでも訪ねてきては、我が家の粗末な絨毯の上に座ってもらえるように、少しだけ準備をしておきたいものである。もちろん、日本人も歓迎である。

注

- 1) (Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428) によれば, ジルガはもともとバシュトゥーン民族の長老会議システムで, バローチ民族には存在しなかった. 19世紀, 英国によってバローチ民族に紹介され設置された.
- 2) ウルドゥー語で書かれイスラーム学科に提出された未刊行の修士論文『バローチ人の習慣と迷信におけるイスラーム教および他の宗教の痕跡』から, 指導教官の一人ハミード・シャーワニー教授 Dr. Prof. Hamid Shahwani の許可を得て, 閲覧, 引用した.
- 3) ヒンドゥー教徒や職能楽師・職人ローリー *lori* のこと.
- 4) マヤールに関する考察は (村山 2002: 152-155) をも参照されし.
- 5) ナングとマヤールの関係は, 古代インドの大叙事詩『マハーバータ』で用いられるダルマ *dharma* (正法・正義) とアダルマ *adharma* (非法) を思い起こさせる. 部族社会時代の物語であり, 部族の掟 (リワージ) を遵守する人々にとって, 正しい行動原理は各々の名誉ある生き方に価値を置いていた. 勝ち負け, 損得ではなく, 名誉ある行動を実践したかが生前も死後も語られる. ゆえにダルマはナング (名誉) と意識することも可能であろう. その対極がアダルマすなわちマヤールといえる.
- 6) Code of Honour と訳されている. (Mengal 2015: 217)
- 7) 名詞 チェルゲージ *chergej* 「敷物, ござ rug, small carpet」(Elfenbein 1990 vol. II: 31)
- 8) 家の敷物の上に座るとは, 何はともあれ客人 (メーマーン) として歓迎されたことを意味する. 「*nun esh ki shuma mani chergeja nishtit, to mani memanit, au memana dushmanani dasta dayag pamma mayare.* 今あなたは我が敷物の上に座っているので, わが客人です. 客人を敵の手に引き渡すなど我らにとって不名誉 (マヤール) となってしまいます」(Barker-Mengal 1969 vol. 1: 435).
- 9) (Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428) では, *refugee, person seeking asylum, refugee-guest.* (Bray 1934: 61) では, *taking sanctuary, refugee.*
- 10) *protector, one who gives asylum* (Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428).
- 11) *custom of asylum* (Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428).
- 12) *asylum, refuge, sanctuary* (Barker-Mengal 1969 vol. 1: 428).
- 13) リワージ三本大柱の客人歓待は文字通りメーマーンダーリー (客人をもつこと) であり, 単にメーマーンという項目ではよばれない.
- 14) *protection.*
- 15) 動詞 ナナワタル *nanawatal* 「入る, 入り込む, 避難する」.
- 16) 名詞 チチー *chichi* (Bray: 86).
- 17) 筆者自身はこの作品の存在自体を知らなかった. 当時ニューデリー在住の高倉裕子氏から紹介と提供を受けて初めて知った次第である. この場を借りて感謝申し上げる.
- 18) 「黒」は不義密通の始末とも重なっている.
- 19) pp. 1-18.
- 20) pp. 19-35.
- 21) 東アフリカ (ケニヤ) に住むバルース (バローチ) 人共同体の代表者から, 「ここではリワージはない」と教わったことがある.

引用および参考文献

- 加賀谷寛 (2005) 『ウルドゥー語辞典』大学書林
 鈴木 斌・麻田 豊 (2006) 『ウルドゥー語常用 6000 語』大学書林, 第6刷

- 縄田鉄男 (1982) 『バシュトー語基礎 1500 語』 大学書林
- (1989) 『バローチー語基礎 1500 語』 大学書林
- 村山和之 (2002) 「バローチ部族慣習法にみる『コウル』の概念について」『和光大学表現学部紀要』第 3 号, 149-166 頁
- (2004) 「バローチ民族の自由をかけた闘いとパキスタン支配」『現代パキスタン分析—民族・国民・国家』(共著) 岩波書店, 41-81 頁
- (2008) 「バローチ民族の英雄と叙事詩—部族慣習法から見るバローチ文化論」『和光大学表現学部紀要』第 9 号, 87-106 頁
- (2009) 「バローチ民族と六信五行」『和光大学表現学部紀要』第 10 号, 160-175 頁
- Ahmad, Jamil (2011) *The Wandering Falcon*. Penguin Books India.
- Barker, M.A. and A.K. Mengal, (1969) *A Course in Baluchi, 2 vols.* McGill Univ. Montreal.
- Bray, Denys De S. (1934) *The Brahui Language, vol. 2 Part III* (reprint 1986, India).
- Elfenbein, Josef (1990) *An Anthology of Classical and Modern Balochi Literature, 2 vols.* Otto Harrassowitz.
- Mengal, Amna Abbas (2015) *Balochon Ki Rusumat, Tavahumat Par Islam Aur Digar Mazahib Ke Asrat*. M.Phil. Thesis in Urdu, Univ. of Balochistan, Quetta.
- Nawata, Tetsuo (1973) AFGHAN BALUCHI. *Memoirs of the Faculty of Literature and Science*, pp.75-114. Shimane Univ. Japan.